

# オーストリア・ブンデススキーアカデミースキー研修報告

山田信幸 工藤亘

玉川学園・玉川大学  
健康・スポーツ科学研究紀要  
第16号

## オーストリア・ブンデススキーアカデミースキー研修報告

山田信幸\*1 工藤 亘\*2

### はじめに

玉川学園では1930年に創立者小原國芳がオーストリアのハンネス・シュナイダーを日本に招聘し、日本の学校スキーに大きな影響を及ぼした。その後、同国ブンデススキーアカデミーおよびその歴代校長との文化的、学術的な交流を深め、多方面に渡り多くの成果を上げてきた<sup>2) 3) 4)</sup>。また、K-12のスキー学校や教員のスキー研修においては、同アカデミーよりスキー教師の派遣を受け、子どもたちや教員へのスキー指導も受けてきた。

しかし、近年はこれらの交流も少なく、学術的な協力体制も希薄となっている。玉川学園および大学においては、スキー実習を通じた体験教育を重要な教育活動として位置づけている。そのためにも同アカデミーとの関係構築や教員（特に若手）の本場での経験は重要である。

そして、今般オーストリア・ブンデススキーアカデミーにおけるスキー研修を行う機会を得た。大学においては国際的な教養を深めるための新規科目開講に向けた調査を兼ねている。研修の期間は平成28年3月19日から3月27日までの9日間である。

研修は以下の内容を主たる目的として行った。

- ① スキー研修により教員のスキー技術向上とスキー指導と新教程の実際を確認する。また、ハンネス・シュナイダー生誕地はじめスキーに関する歴史的・文化的遺構を訪問する。
- ② ブンデス・スキーアカデミーとの事業連携確認および健康教育分野における研究協力体制を構築する。
- ③ インスブルックなどの都市・地域を訪問し、ヨーロッパの文化・風土に触れる。

以下、研修活動・視察内容および課題について報告する。

### 1. 研修活動・視察内容

研修の旅程は表-1（文末）に示す。

#### (1) スキー研修（実技）

到着翌朝からアカデミー所属インストラクター（国家検定員）Martin氏によるスキー研修を行った。当初より天候に恵まれ、良いコンディションの中スキー研修に入った。ヨーロッパ特有の岩山に広がる広大なバーンをロングライディングすることは、爽快感と達成感など日本では感じることでできないスキーの魅力と醍醐味を味わうことができる。前半3日、後半2日の研修はほとんどがスキーツアーと呼ぶべきもので、St Christophを中心としたArlberg地方の主要なバーンの殆どを滑走す

ることができた。特に2日目に登ったValluga山頂（2811m：St Christoph近辺では最高峰）からの眺めの素晴らしさは言葉に表現できないくらいの感動を与えてくれた（写真1,2）。また、最終日のZursからヨーロッパで有数の高級スキーリゾート地であるLechまでのロングツアーは、世界トップクラスの滑走距離を誇り、日本国内では味わえないまさにスキー観を変えるほどの貴重な経験である。

スキーを通じてその爽快感や楽しさなどスポーツ本来の魅力を感じる。自然の素晴らしさや荘厳さ、また、それらの情緒的働きかけを再確認することができた。同時に小原國芳がスキーを通して自然の魅力とともにその厳しさを子どもたちに「ぶつけてやるのだ」<sup>1)</sup>

\*1 教育学部准教授 \*2 教育学部准教授

と考えた理由を実感した。



写真1 Valluga 展望台



写真2 Valluga を臨む

広大なピステなど環境の違いはあるがオーストリアにおいては技術指導や講習という形態は非常に少ない印象である。日本におけるスキーは技術指導の割合が高い傾向にあるが、当地では「スキーをする」ことそのものが目的であり、楽しみであるという考え方が根本であり、「技術を習得すること」「教えること」「学ぶこと」という考えが前面に出がちな日本のスキー学校とは趣を異にする。期間内では技術指導やスキルアップの方法も幾つか実習したが、基本的なアルペン基本姿勢に関することがその中心である。環境の整備も素晴らしく、シートヒーター付きや8人乗りリフトの導入で運搬能力も非常に高い。「待つ」時間はほとんど無く、快適な環境が提供されている。



写真3 8人乗りリフト

また、子どもたちに対しても手厚い体制でスキーが行われている。滑走する大人とは完全に区別されたキッズエリアの整備、Tバーリフトやベルト式の登坂機の設置、関わる多くの大人、遊び感覚の多くのメニューが用意されている。幼少期からスキーや雪上での運動に親しむ環境がハード・ソフトともに整備されているおり、育成と安全が両立している



写真4 キッズゲレンデ



写真5 キッズ専用ゲレンデ

(2) スキー研修（理論講義・歴史的遺産）  
アカデミー会議室において、複数のスタッフ

による講義を受けるとともに K-16 スタッフで今後の本学のスキーに関する取り組みや方向性を議論した。

#### 1) 理論講義

##### ①「スキー・スノースポーツにおける安全」に関して Sebastian 氏

整備された安全なバーンからオフピステに至るまで様々な状況に対する安全管理、ツアー運営者としての指導者の知識、FIS（国際スキー連盟）による 10 の国際基準のルールなど詳細にわたる説明・解説を受けた。スキー指導者として技術指導をすること以上に安全に関する知識と責任感は、学校スキーを運営する我々にとっても大いに参考にするべきである。オフピステにおける安全は自己責任によるところが大きいですが、幼木を守る（環境への配慮）ために禁止エリア侵入などの違反者を厳罰に処する規定は、国や地域をあげて環境を保持する高い意識の現れである。近代スキーのテーマである「自然の有効利用と保護」にも即しているものである。

##### ②「スキーアカデミーとスキー技術の歴史」

Herbert Mandl 氏（写真 6）

ブンデススキーアカデミーは 1923 年に国営のブンデスシュポルトハイムとして始まり、1998 年にブンデススキーアカデミー・サンクリストフ（SKI AUSTRIA ACADEMIY）として民営化されて現在に至っている。アカデミーでは技術体系をはじめとする「スキー教育学」の発信とともに、スノースポーツと地域の冬季ツーリズムの中心的な役割を果たす重責を担う。



写真 6 Herbert Mandl 氏

初代校長エルンスト・ヤナー教授によるスキー教程は 1926 年に第 1 版が出版された。その後の 2 代目校長のシュテファン・クルッケンハウザー教授<sup>2)</sup>、3 代目フランツ・ホピヒラー教授<sup>3)</sup>、4 代目ヴェルナー・ヴェルンドレ教授については玉川学園とのつながりの中でも馴染みが深い。ヴェルナー氏とは本学のスキー学習指導教材 CD-ROM「SKI-COSMOS」開発<sup>4)</sup>で共同研究を行い、ICSS での発表<sup>5)</sup>など国内外で注目を集めた。マンデル氏は 5 代目の校長として 2012 年より現職にある。ジュニア世代や女性を始めとして、トップレベルのスキーヤーへの指導歴も長く、多くのオリンピック・世界選手権メダリストを指導してきた。アカデミーにおいてはインストラクターの統括や様々なスキーキャンプのコーディネーターとして従事している。また、1999 年の共同研究時に活躍したノベルト・ガイスラー氏がインストラクターのまとめ役としてその補佐役を担っている。

現在、アカデミーでは世界各国から多くのスキーキャンプを受け入れており、その形態は様々である。日数や内容など柔軟な対応が可能であり、本学のスキー実習の受け入れについてもマンデル校長から前向きな回答を得た。また、K-12 に対するインストラクター派遣などについても今後継続的



に交渉することを確認した。学術的な協力については今後の関係づくりが重要である。まず、スキーキャンプ（実習）を早期に実施し、継続することでアカデミーとの友好関係を深め、その後の共同研究への足がかりとしたい。

#### ④ 「新オーストリアスキー教程と改訂の経緯」 Andreas 氏（写真 7. 8）

前スキー教程を 11 年ぶりに改訂し、半年前に新スキー教程が提示された。今回の改訂は、カービングスキー（マテリアル）の多様化とそれともなうスキー様態の変化に則したものであり、最終的な目標は「レース」である。しかし、中心に据えられているのは“アルペン基本姿勢”であり、古くから変わらない。時代の変化に対応し新しいものに取り組みながらも、普遍的なものを中心に据えている。



写真 7 Andreas 氏

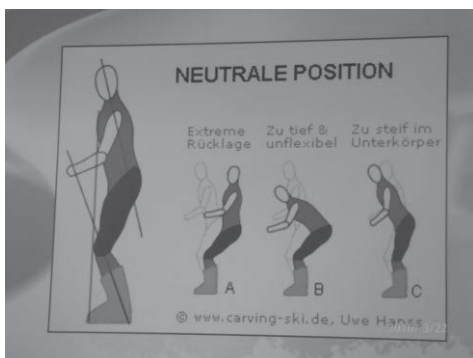


写真 8 スキー教程についての講義

#### ② K-16 スタッフによるディスカッション 低学年、中学年における展開の仕方、系統性

をいかにもたせるかを明確にしたい。「スキーに親しむ」「スキーを楽しむ・技術を習得する」「技術を高める」ことを段階的に修得し、最終的には中学年で検討中の「検定の導入」も視野に入れる。検定の導入に関しては、選択制にするなどを含め慎重に議論する必要がある。また、保健体育専攻学生が低・中学年に指導するなどの一貫校としてのアドバンテージを活かした教育システムづくりが必要であろう。

#### 2) スキーに関する歴史遺産

スキー研修の合間に Arlberg 地方のスキーに関連する博物館等を訪問した。

##### ① シュナイダー生家および生誕地 Stuben への訪問

シュナイダーの生家がある Stuben には、St Christoph からスキーによるロング滑走での移動が可能である。生家は現在一般家庭が入居しており当時の建物は無く、壁面にシュナイダーの生家であることを示す銅板があるのみである。近くには近年建てられたシュナイダー像があり、スキーヤーの目に触れている。

##### ② スキー博物館・郷土博物館

St Anton の駅近くにあるスキー博物館（MUSEUM ST. ANTON AM ARLBERG）では、玉川学園や小原國芳が登場する動画をはじめとする資料が展示されており、改めて玉川学園とのつながりを認識することができた。また、シュナイダーの日本への訪問には、奥様の助言が大きな役割を果たすという新たな事実を知ることが出来た。

Lech においては、郷土博物館（Lechmuseum Huber-Hus）を訪ねた。現地の古い建造物や当時の生活習慣を見ることができる展示内容で文化的な価値も高い。そこで販売されている書籍「Hannes Schneider」（Hans 著）においても、玉川学園訪問や小原國芳との交流を示す著述や写真が見られた。このように Arlberg 各地で

ハンネス・シュナイダーに対する認識の高まりとともに、玉川学園の存在が確たるものと確認できる。

### 3) スキーショー

St Anton の街ではシーズン中毎週水曜日の夜にスキーショーが開催されている。バーンを利用したプロジェクションマッピングから始まり、スキー技術や道具の変遷など様々な趣向をこらした演出のスキー・スノーボードのショーを繰り広げている。エンターテイメント性の高いショーで、近隣のスキーリゾート地からも多くの観光客が訪れている。(写真9)

以前の小さな田舎町という風情の St Anton の町並みからは想像できないような立派なリゾート地への変貌は、斜陽化傾向から抜け出せない日本のスノーリゾート地にとっても参考にすべき方策が取られていることが想像される。



写真9 スキーショー

### (3) 文化遺産見学 (インスブルック郊外および市街見学)

スキー研修の中日を利用して St Anton から電車で約1時間の位置にある Innsbruck を訪問した。インスブルックの中心にある旧市街には黄金の小屋根、宮廷教会、大聖堂、ホーフブルク王宮など中世の重要な建築物が多い。また、市郊外に16世紀に建てられた Umbrus 城 (アンブラス城) はルネサンス様式の歴史的建造物であり、多くの歴史的・文化的な遺産や美術品が展示されている。郊外の Bergisel (ベルク

イーゼル) ジャンプ台は、インスブルックで行われた2度(1964, 1974年)の冬季オリンピックのジャンプ競技の会場である。市街の西方に位置するジャンプ台では各種国際大会が開かれている。現在のジャンプ場はオリンピック当時のものではなく2002年に建設されたものであるが、オリンピックレガシーを垣間見ることができる。市街からバスとゴンドラ「ノルトケッテンバーン」で近郊の山(ハーフェレカー山: 標高2334m)まで行くことができ、インスブルック市街や遠くアルプスまで一望することができる。その眺めは素晴らしく一見の価値がある。

インスブルックでは歴史的な建造物とともに現代的な建築物、そして、大自然の眺望までを短時間のうちに見学することができる。「インスブルックカード」と呼ばれる有料パスがあり、各種文化施設や博物館の見学、それらを結ぶ観光バス(サイトシーアバス)を一定料金(24時間24ユーロ)で利用ことができ、観光の利便性を高め、コストパフォーマンスにも優れている。

以上、スキーの実技研修、ヨーロッパの文化的・歴史的な観点から、当初の研修目的について概ね達成することができた。

## 2. 科目開講に向けての提案と課題

本研修を踏まえ新規開講科目においては以下の3点を主な内容として構成する

### 1) スキーキャンプ(実習)

スキーを通じて自然の魅力とその厳しさを体験するために、世界一とされるスキー大国でのスキー実習を本授業の中心に据える。本研修と同等の滑走エリアの体験および体力的にも4ないしは5日の実習が適している。

実習の間には Arlberg 地方スキー場各地の

スキー博物館, 郷土資料館等を訪問し, 歴史的, 文化的な側面からの教養を高める機会を得る.

## 2) スキーを通じた歴史・文化的遺産訪問 とスキーリゾート地の経営の実際

St Anton はじめとする Arlberg 地方一帯のリゾート地としての発展はめざましく, 経営学的な視点からも調査・研究する機会を与えてくれる. どのようにして発展を続けているのかは, 日本のスノー(スキー)スポーツの斜陽化に対する取り組みの切り口となる. 観光やスポーツ経営に興味のある学生に向けても魅力ある分野である.

Lech や Oberlech においてはバイオマスエネルギーにより一帯の暖房を賄っている. 村を上げてのバイオマスエネルギーの利用や様々な面でのエコに関する取り組みは世界でも随一である. この取り組みは日本でもメディアや各種研究会でも取り上げられ, 小林<sup>6)</sup>は, 観光地の自律性という観点からこれらを紹介している. また, 2015 年には「オーストリア森林フォーラム in 長野」が開催<sup>7)</sup>され, 産業界を中心として継続的に活動が行われていることが伺われる.

## 3) ヨーロッパ諸国のスポーツ文化の理解 と経験

近年, 日本においては地域密着型クラブによるスポーツ振興策が掲げられているが, そのモデルはドイツをはじめとするヨーロッパの総合型地域スポーツクラブである. その現状を知ることが, 今後のスポーツ振興に関わる保健体育専攻学生には大きな刺激となる. そこで体育学生に向けては, ウィーン(オーストリア)やミュンヘン(ドイツ)のサッカーチームの所属地域やスタジアム見学, 試合観戦も視野に入れたい. ミュンヘンはオーストリアの隣国であるが, St Anton のあるアールベルグ地方からはインスブルック経由の電車で3時間程度と比

較的に近く, 移動には問題はない. 一方, ウィーンはオーストリア国内でありながら Arlberg 地方からは距離が遠く本研修でもウィーンからトランジットでインスブルックに入り小型バスでの移動となった. 時間的な面で効率的とはいえない. また, ウィーンはオペラなど芸術文化に関して世界で有数であるものの, 学生にとっては敷居が高い感は否めず, コスト的にも厳しい. チューリッヒ(スイス)は典型的な中世都市として数多くの歴史ある建造物が残る観光都市である. 国立博物館やオペラハウスなどの文化的な施設も多い. 金融都市として国際的にも評価が高く, また, 世界最大のスポーツ組織である国際サッカー連盟(FIFA)本部がある. 市の中心街から3kmほどと近く, 多くの歴史的建造物や文化遺産などの市街観光とともに訪問するに適した都市である. Arlberg 地方にも電車で3時間程度と利便性が高い.

これらを踏まえると, 体育専攻学生を中心とした教育学部学生のみならず, 観光学部学生や農学部学生にも募集の巾を広げることで, 履修学生の獲得など安定した開講が期待できる.

スキー実習およびそれらの歴史的・文化的遺産訪問に5日間, インスブルック, ミュンヘン, チューリッヒいずれかへの訪問に2日程度, 移動を含め計9日程度の日程が現実的な旅程である.

今後の課題としては, 1. ブンデススキーアカデミーとの緊密な連携 2. Arlberg 地方における各スキー場をはじめとするリゾート地の観光戦略の事前調査 3. ミュンヘン(ドイツ)の地域スポーツクラブおよびチューリッヒ(スイス)の文化・歴史的遺産の先行調査 4. ドイツ語を中心としたコミュニケーション方法(人材)の確立などがあげられる.

また, 開講形態, 対象学生(学部), 募集規模等詳細にわたる検討が必要である.

学生にとって有意義で魅力的な科目となるよう, 今後も調査・検討を重ねていきたい.

本研修は教育学部機関である健康教育研究センターとしての活動であり、また、K-12 体育教員による「小原國芳教育学術奨励基金助成」との共同企画である。

<参考文献>

- 1) 小原國芳 全人教育論 玉川大学出版部 1969
- 2) シュテファン・クルツケンハウザー編 「Ski Heil」「Ski Heil II」「Ski Heil III」 玉川大学出版部 1964
- 3) フランツ・ホピヒラー 「オーストリア スキー教程」スキージャーナル 1972
- 4) 玉川学園体育センター編 「SKI COSMOS」 玉川大学出版部 1998
- 5) 森本信雄他 「SKI INSTRUCTION SUPPORT SYSTEM USING NETWORK ENVIRONMENT」 2<sup>nd</sup> INTERNATIONAL CONGRESS ON SKIING AND SCIENCE 2000
- 6) 小林英俊『観光地の自律性が求められる時代』 — 海外から見えてくる「新しい観光の流れ」 — 財団法人日本交通公社 2001年8月  
[www.jtc.at/site/category327-page375.html](http://www.jtc.at/site/category327-page375.html)

<参考資料>

- 7) オーストリア森林フォーラム in 長野  
[www.advantageaustria.org/jp/events/2015.11.05\\_AVZ\\_fin.pdf](http://www.advantageaustria.org/jp/events/2015.11.05_AVZ_fin.pdf)



表-1	H27年度オーストリアスキー研修 旅程表		2016. 3.19-27
	午前	午後	夜
3月19日	成田空港集合	成田空港→ウィーン空港→インスブルック空港	→(バス)ブンデス・スキーアカデミー到着
3月20日	スキー研修準備(スキーレンタル、リフト券購入他) スキーレッスン①(St.Christoph～Galzig Bahn標高1800m)	スキーレッスン②((St.Christoph～St.Anton標高1304m) 講習後 バスにて移動 St Anton視察	
3月21日	スキーレッスン③ (Valluga標高2811m)	スキーレッスン④(Rendi標高2030m)	安全講習会(Sebastian氏)
3月22日	スキーレッスン⑤ (Stuben標高1407m)シュナイダー生家見学	スキーレッスン⑥ (St.Anton標高1304m)	スキーアカデミーの歴史(アカデミー校長:Herbart Mandl)
3月23日	アカデミー前バス(8:40発) →アントン駅 →インスブルック駅	インスブルックカード購入→アンブラス城→ベルクイーゼル・ジャンプ台→インスブルック大学→旧市街→インスブルック駅(17時40分発)→アントン駅	スキー博物館見学→スキーショー見学 アントン(バス22時15分発)→St Christoph
3月24日	スキーレッスン⑦ (Lech標高1450m)バスで移動	スキーレッスン⑧ (OberLech標高1660m) 郷土博物館見学 →St Christoph(タクシーで移動)	玉川K-16のスキーの今後について(玉川スタッフによるディスカッション) オーストリアスキー教程の改訂について(Andreas氏)
3月25日	スキーレッスン⑨ (Zurs標高1716m→Zug標高1511m)	スキーレッスン⑩ (Zug標高1511m→Lech標高1450m)	スキーアカデミースタッフとの情報交換・懇親会
3月26日	St Christoph5:00発 バス →インスブルック空港	→ウィーン空港 14:00発	
3月27日	→成田空港 8:00着 帰国		